

アキタラクティブ アイ

# Akitaractive Eye

～主体的・対話的で  
深い学びのために～

外国語活動・外国語編

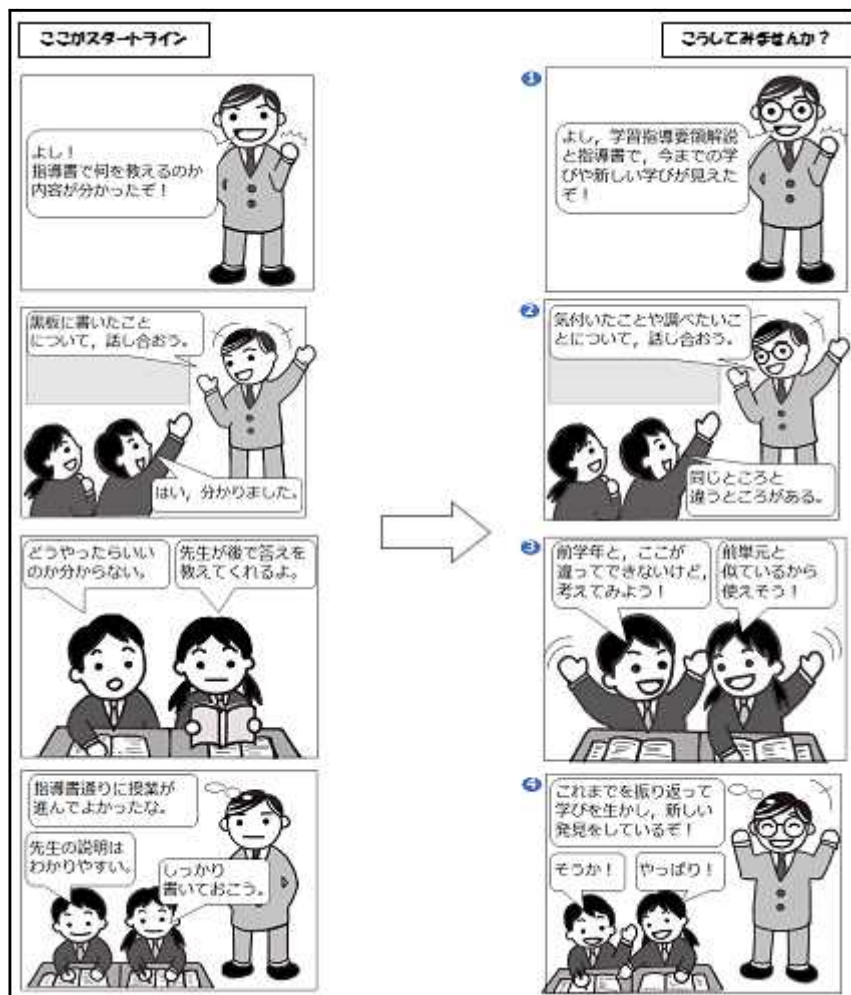


これまでの学びを振り返り，学びの中での気づきを  
手掛かりに新たな学びが始まる。

外国語活動  
外国語

キーワード

- ① 具体的な課題 ←
- ↓
- ② 主体的に外国語を捉える(選ぶ)
- ↓
- ③ 活動を単元の中で繰り返す



## 1 わくわく授業をするために

### ◇資質・能力を焦点化する

外国語(活動)の授業の目標は全て「コミュニケーション」。題材でどのようなコミュニケーションをさせたいかを考え、どの知識・技能を活用した言語活動を展開するかを明確にしましょう。

- ① 活用する知識・技能を与えるだけでなく、子どもが「これを使えば伝えられそう」と主体的に外国語を捉えることができるようにします。
- ② 資質・能力は1単位時間の活動では十分に育成されません。育成に向けた活動を、単元の中で繰り返していきます。

### ◇入念な教材研究をする

単元(題材)で学ぶことで「何ができるようになるか」を、子どもが意識して授業に臨むようするために、単元(題材)の学習後の子どもの姿を明確にすることが大切です。

- ① 単元(題材)がねらいとする技能領域の特徴を考える。  
→即興性のある対話/準備してのスピーチ など
- ② 子どもの実態(興味・関心、つまずき)を考える。
- ③ 子どもの実態から学習到達目標を設定する。  
→英語で何がどれくらいできるようになるか
- ④ 学習活動の具体と時間配分を考える。



外国語活動  
外国語



## 2 3 学びをつなげるために

### ◇教科等の特質を踏まえる

#### 言葉の力を付けるために「内容ファースト」

中学校・高校では、語彙・表現の正確さ、言わば「形」に重きを置く傾向があります。小学校中学年でスタートする新しい外国語教育では、形よりも伝えたい内容の伝達に重きを置いて指導していることを踏まえ、言語活動の適切な場面設定を工夫しましょう。

#### 外国語の世界を子どものリアルに関連付ける

教科書の題材やALTを通して、ダイレクトに外国のことを学べるのが外国語の授業の魅力です。その学びを「自分のこと」として捉えられるように、題材内容を子どもの実生活や体験と関連付けて指導しましょう。他教科の学習内容や学校行事と関連付けた授業は、子どもにとって特に魅力的です。

### ◇子どもの声に耳を傾け受け止める

#### 子どもは多くを知っている

子どもは聞いたり話したりしたことがある英語をたくさん知っていますが、関連した知識・技能として結び付いていません。発音と綴り、語彙と文法などもそうです。今一つすっきりしていなさそうな子どもに寄り添い、子どもが既にもっている知識や経験をつなげることで、「そうだったんだ！言葉って面白い」と思えるような授業を目指しましょう。

#### 子どもにとって意味のある学びをつなげる

前時にやり取りした内容をしっかり見取って、本時の活動で役に立つようにする工夫や仕掛けをするなど、内容面でのつながりを大切にしましょう。

## 4 新たな学びを出発させるために

### ◇適宜、振り返る場面を設定する

外国語でコミュニケーションを図る力を養うには、「分かったこと」だけでなく、資質・能力に関する振り返りが大切です。それを子どもが実感できると、「じゃあ、今回の言い方を使えば別のことも言えるかな」と新たな問いや学びにつながります。

- 1 Warm-up
- 2 デモンストレーション
- 3 Today's Goal
- 4 ペア活動
- 5 グループ活動
- 6 全体の前で発表
- 7 書いてまとめる
- 8 振り返り

また、授業終末の振り返りだけでなく、それぞれの活動や各段階で必要に応じて振り返ることで、他の活動で新たな学びが生まれます。

### ◇課題づくりの場を設定する

外国語(活動)の授業では、疑問形での課題設定や、子どもの声から課題を設定することが難しいことがあります。

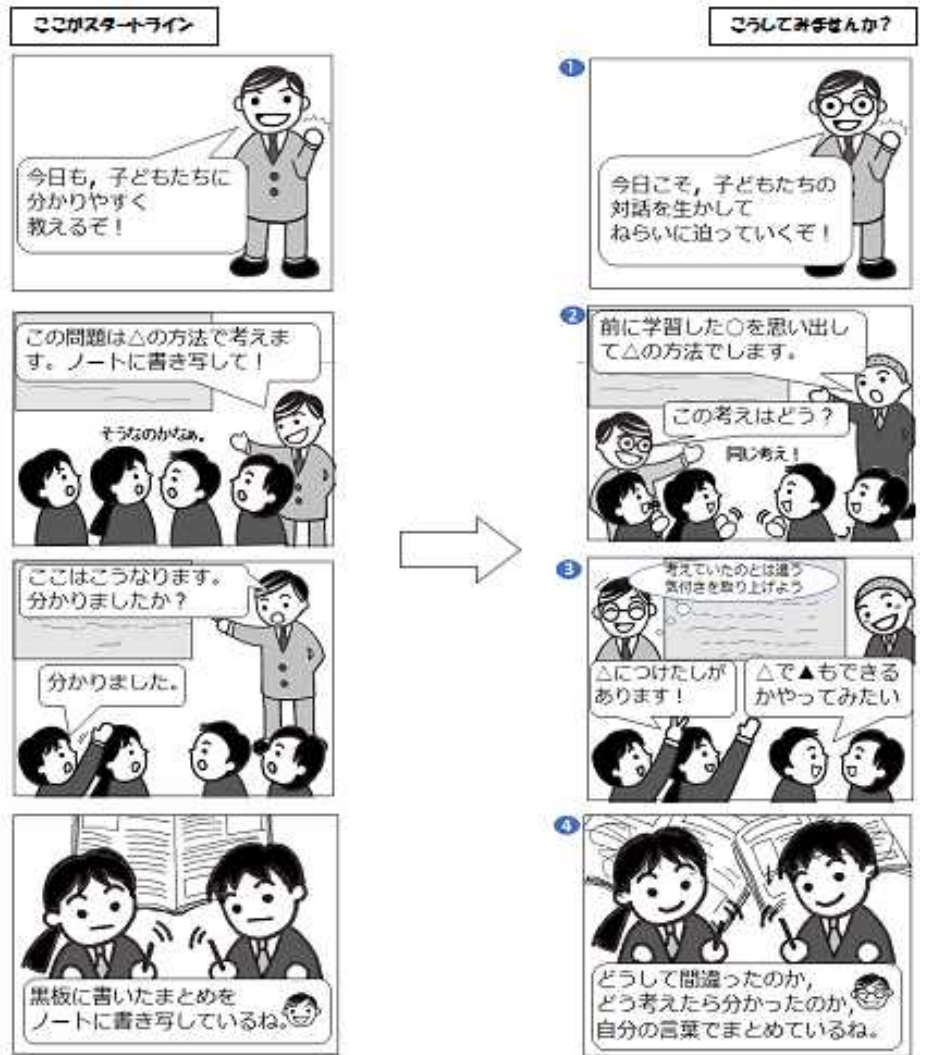
それでも、具体的な課題を設定・共有し、子どもがコミュニケーションの目的や場面、状況などを意識できるようにしましょう。

そのためには、例えば、本時の題材となるコミュニケーションの場面をALT等とデモンストレーションで子どもに示し、①何のために、②どんな場面や状況で、③誰に対して、④何をしているのかを、子どもたちに考えさせたり、どのような英語を用いていたかを聞き取らせたりすることも効果的です。

互いの考えを伝え合い、相手の考えを受け止め、自分の考えを練り直す。

外国語活動  
外国語

キーワード  
対話を通して  
違いへの気付き  
教室で外国語を学び合うよさ



# 1 ねらいに迫る授業をするために

## ◇学習活動を吟味する

ねらいを達成するために最適な学習活動になっているかを、例えば次の視点で検討しましょう。

- 子どもの実態
- 言語材料
- 導入
- 言語活動
- 選び直したり、やり直したりする機会
- 評価規準と評価方法
- ねらい
- 技能領域
- 慣れ親しむ(理解・習得)活動
- 技能の統合
- (☑)を入れる

## ◇効果的な学習支援を考える

学習活動を吟味する際に、子どもの実態から予想されるつまづきへの手立てを考えておきましょう。

- ・その場で考えて話す活動に慣れているか？抵抗や困難を感じる子どもが多いのでは？  
→距離の近いペア活動からグループでの活動へ。  
→ヒントを見たり教え合ったりしてよいと伝える。
- ・対話の継続に苦戦することが予想されるのでは？  
→それでも英語で会話を膨らませられるトピックは何かを考える。 ※「話すこと[やり取り]」の例



## 2

## 「見方・考え方」が働くようにするために

外国語では、①活動の目的や場面、状況等を理解し、どの英語が使えるかを捉えようとするときと、②伝えたい「内容」と伝えるための「英語」の両者を思考・判断するときに「見方・考え方」が働きます。

## ◇これまでの学習を踏まえる

「〇〇で使った英語を使えばできそう」だと気付くような仕掛けが大切です。使えそうな語彙や表現を意図的に復習で取り上げたり Warm-up に取り入れたりします。学習した題材内容を子どもの身近なことに関連付けるのも有効な手立てです。

## ◇多様な展開を考える

予習ではしない活動を通して英語を使わせましょう。  
例1 既習事項を振り返る場を設定する  
例2 段階的に伝え合う内容を追加していく(話し手、聞き手のそれぞれに課題を課していく)  
例3 学習段階に応じて伝え合う相手や話題を変える

## 3

## 気付きを生かした展開にするために

## ◇子どもの思考の流れを理解する

外国語の学習は、ネイティブ・スピーカーの思考を理解することでもあります。子どもの言語活動は、インプット(外言:外国語)→思考・判断(内言:母国語)→表現(外言:外国語)となっていることを踏まえましょう。言葉は頭に浮かんだ順に出てくるものですから、語順の違いへの気付きこそ本質的な学びであると言えます。豊富なインプットを基に、語順の違いについて改めて考え、表現し直す場面を設けてみましょう。

## ◇子どもの様々な反応に柔軟に対応する

子どもが素朴な疑問をもったときが、言語の背景にある文化への気付きを促す絶好のチャンスです。ALTや画像・動画を活用して分かりやすく異文化を提示し、豊かな学びにしていきたいと思います。多少の誤りは、対話や発表を遮らない程度に教師が正しく言い直し(recast)、音声面からの気付きを促します。想定外の反応に対しては、その原因を考え、子どもの思考の流れをしっかりと把握した上で気付きを促しましょう。

## 4

## 問題解決における一連のプロセスを重視するために

## ◇子どもの試行錯誤を大切にする

例えば、ALTと直接やり取りすることは、子どもにとって「どう言えば伝わるの」ともがいたり試行錯誤したりする場面であり、これが新しい英語を学ぶ動機付けになります。支援をしつつ、時間をとって最後まで話すようにさせましょう。友達のやり取りを見て自分との違いに気付くことも大切な学習です。教室で外国語を学び合うよさを生かす課題や活動を設定しましょう。

## ◇獲得した学びをまとめる場を設定する

授業で学んだ知識・技能は、それを活用する言語活動を單元の中で繰り返すことで定着し、必要ときにまたいつでも使える状態(=深い学び)を目指します。毎時間の振り返りに加えて、單元(題材)などのまとまりで子どもに視点を与え、変容の自覚を促す振り返りの場を設定することが大切です。  
[視点の例]・課題解決に使う力が身に付いたか  
・その力は他にどんなことに使えそうか

# 連続する学びは力へ。 新たな学びの獲得と新たな学びを創出する。

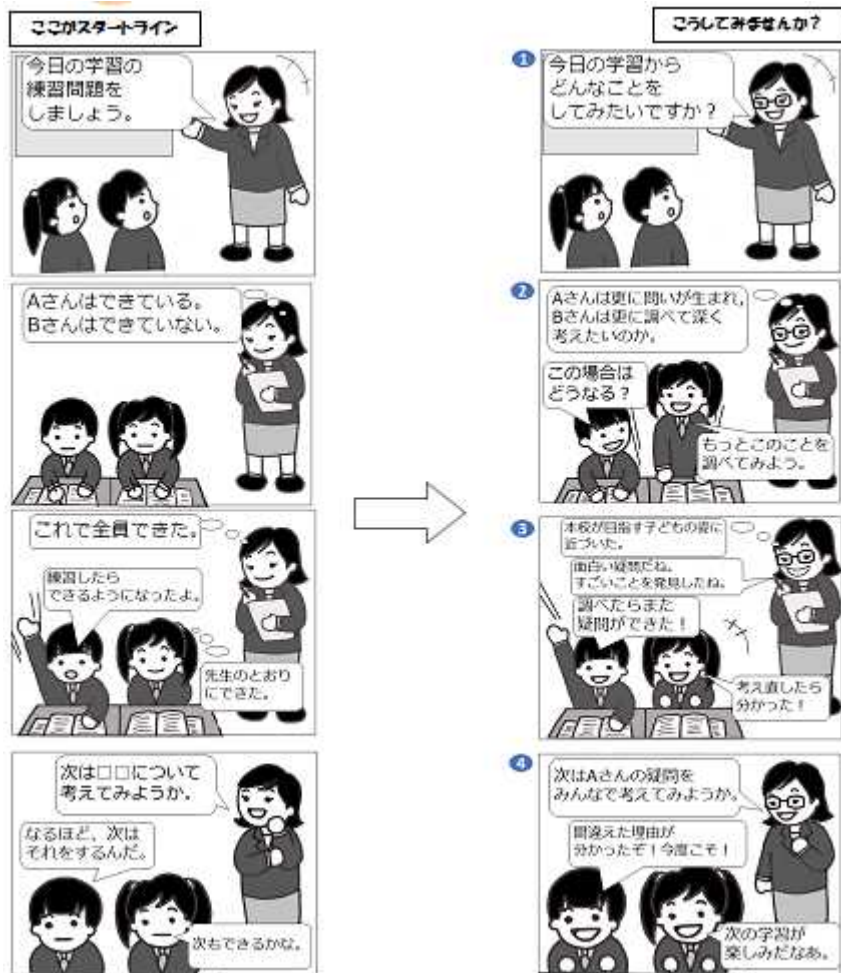
外国語活動  
外国語

キーワード

学びを生かす場面設定

学びの見取り

学びのつながり



## 1 活用・発揮を促すために

◇学んだことが生かされる場面を設定する

インタビュー(やり取り)で得た情報を、発表する活動につなげる場合があります。語句や表現は似ていても、やり取りした内容や英語を基にして全体の前で話す活動では、負担が大きくなりすぎないように配慮しましょう。聞く側にも課題を与える、発表内容を書いて読み合うなどの工夫も大切です。

また、他教科等の学びや行事を学習した題材内容や言語材料に関連付け、身近なことを外国人に発信する場面や、類似した英語を聞いて(読んで)新たな情報をつかむ場面などを設定しましょう。

◇振り返りから課題を引き出す

発表で伝えたかったけれども十分伝えられなかったことを補って書く活動や、伝えたつもりでも実は伝わっていなかったところを改善する活動を通して次回は大丈夫という自信をもたせるようにしましょう。授業で使った英語が、他の場面や状況でも使えることが自覚できるように振り返らせ、次の課題への意欲につなげることが大切です。

自分の町紹介

- 外国人観光客におすすめの場所を紹介するのにも使えそうだな。
- 自己紹介をするときに、自分の町のことをもっと詳しく言おう。



## 2 学びを見取るために

### ◇評価方法を検討する

目指す子ども像に照らして「～しようとする」「～することができる」という子どもの具体的な行動目標から評価方法を設定します。

**聞くこと** 非言語による意思表示(挙手, ○を付ける, 線で結ぶ)から始め, 徐々に英語使用へ。

**話すこと** ペア活動では, ねらいに応じて対話のどちらか一方に重きを置く, グループ活動では話し手だけ立たせ, 聞き手は座らせるなどの工夫を。

**読むこと** 質問に答える, 内容を友達に伝える, 要約する, 意見や感想を書くなど多様な方法で。

**書くこと** ノート(シート)での指導と評価が主になります。書かせたら, 子どもが読み合う活動も大切に。

### ◇授業プランを修正する

子どもの反応や学びを見取りながら, 負荷を増減する, 時間を増減する, 相手を替える, などのほか, 大胆に活動の順序を変えることも考えられます。

ねらいがぶれることなく, 子どもの実態に応じて臨機応変に対応するためには, 「指導内容と指導方法への深い理解」\*が必要です。\*Vol. 1-①参照

## 3 学びの実感を促すために

### ◇子どもの変容を取り上げる

「できたね」「ぼんやりしていたものがはっきり分かったようだね」などほめることは自己有用感を育むために不可欠です。さらに, その要因を見取って, 子どもの変容を価値付けることが, 学びの実感と見方・考え方の成長につながります。二つの「子どもが見方・考え方を働かせるとき」\*をしっかり押さえましょう。\*Vol. 2-②参照

### ◇フィードバックして働き掛ける

「相手を見て, はっきりと」「ジェスチャーを付けて分かりやすく」などの態度面や, 英語の流ちょうさは子どもにも分かりやすいところです。しかし, 「～について詳しく説明しよう」などの課題を解決するために内容を工夫した子どもには, その説明について効果的に助言したり英語で評価したりしてあげましょう。ALT等を活用すると効果的です。

## 4 新たな学びを創り出すために

### ◇学習全体を振り返る場面を設定する

振り返りカード等を活用し, 1単位時間を通して「～できた」と肯定的に意識できるようにするとともに, 単元(題材)の中で一定のスパンで力が付いてきたかを振り返る場面を設定しましょう。  
中盤で: 単元で付けたい力に必要な知識・技能  
終盤で: 知識・技能を活用したコミュニケーションの整理と一般化 → 将来使えるように

### ◇新たに学びが連続するようにする

子どもに資質・能力ベースで系統を意識させるには, 単元や領域を越えて学びがつながっていることが分かるようにしてあげることが大切です。  
小学校: 繰り返し出てくる表現が様々な場面で実際に使えることを実感させましょう。  
中・高: Can-do リストにある評価では, どの単元で学習した表現を使ってもよいことを伝えます。

---

# Akitaractive Eye

～主体的・対話的で深い学びのために～

